

学校種間の円滑な接続による中1ギャップ解消に向けた実践

苫小牧市立明野中学校 学級数 10 (校長 山岸 弘昇)

I 実践テーマの報告

小学校から中学校への円滑な接続に向け、「中1ギャップ問題未然防止事業」による加配教員を中核として、小中連携教育に係る「苫小牧市学校教育力向上エリア会議(以下:エリア)」で設置されている「学力向上部会」、「生徒指導部会」、「特別支援教育部会」の各取組の連携の充実を図っている。

II 実践の概要

(1) 学力向上

① 不登校児童生徒への ICT 端末を活用した対応

家庭版「e ライブラリ」を活用して学習状況及び履歴を把握するなど、時間的・空間的制限を受けずに当該児童生徒の学びを保障した。

② 学力の定着に課題のある生徒への対応

生徒が自らの課題を把握して学習を進めることができるよう、家庭版「e ライブラリ」の活用を推奨した。

③ 乗り入れ授業の実施

教科の特質や児童生徒の実態を踏まえ、中学校教員による社会科及び理科の2教科で実施した。



【理科の乗り入れ授業】

(2) 生徒指導

① 不登校児童生徒への対応

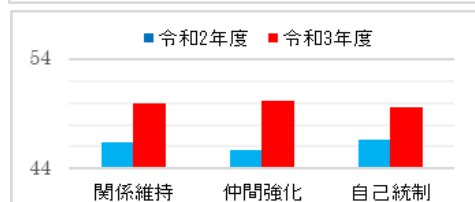
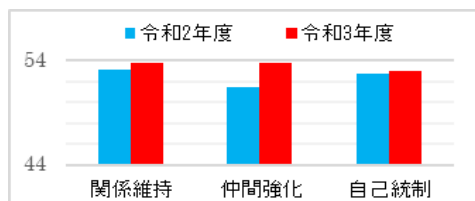
学級への帰属意識を高めるために、Microsoft Teams のチャット機能やWeb 会議システムを活用し、学級担任及び教科担任とコミュニケーションを図る機会を拡充した。

② 不登校児童生徒の早期発見・早期対応

潜在化している不登校児童生徒の早期発見・早期対応を行うために、欠席日数が10日以上20日未満及び欠席の理由が明確ではない児童生徒に係る欠席の状況把握及び対応の検討を行った。

③ 「ほっと」を活用した学級経営の充実

学級・学年の支持的風土を醸成するために、子ども理解支援ツール「ほっと」を活用して「関係維持」、「仲間強化」、「自己統制」の3因子を計測し、その結果を踏まえた特別活動を各学級で実施した。



【子ども理解支援ツール「ほっと」による同一集団の経年比較】
(上: 現第2学年 下: 現第3学年)

(3) 特別支援教育

① 不登校児童生徒に対する合理的配慮を踏まえたアプローチ

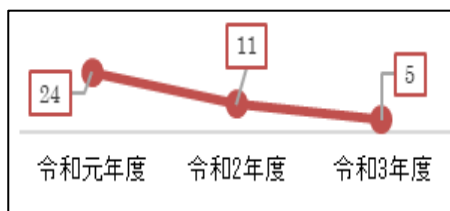
本校の不登校生徒のうち合理的配慮を必要とする生徒の割合が27%であり、要因に正対した取組を進める必要があることから、生徒理解に係る研修を実施して生徒一人一人の特性を把握するとともに、合理的配慮を踏まえ、必要に応じて学びの場を変更した。

III 実践の成果と課題

○ 中学校区における共通・一貫・協働した取組の推進及び子ども理解支援ツール「ほっと」の客観的な指標を踏まえた学級経営の工夫・改善により、新規不登校及びいじめアンケートで「嫌な思いをしたことがある」と回答する生徒数が減少した。

○ 加配教員がエリアの取組を俯瞰して取組状況を把握したことで、各部会の連携が強化され、取組の充実が図られた。

● 小中連携を持続可能な取組にするため、児童生徒はもとより、小・中学校の教職員の交流の充実を図る必要がある。



【「嫌な思いをしたことがある」と回答した生徒数(全学年)】